

Bleak House

——階級がもたらす孤立状態と個人による孤立状態の超越——

吉 田 一 穂

序

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) は、*Bleak House* (1853) において、大法官裁判所のあり方を批判するだけでなく、エスタ・サマソン (Esther Summerson) の出生に関わるミステリーと、タルキングホーン (Tulkinghorn) 殺害に関わるミステリーを描き出している。

ホーンバック (Bert G. Hornback) が指摘しているように、オルタンス (Hortense) がタルキングホーンを殺すことは、彼女が象徴的な意味でデッドロック (Dedlock) 夫人の生霊であるという点で重要である。すなわち、*Great Expectations* (1861) でオーリック (Orlick) がピップ (Pip) の姉に襲いかかることによってピップのために行動するように、オルタンスがデッドロック夫人のために行動することから、彼女は生霊として重要な役割を担っている (Hornback 83)。このように、作品には象徴的側面があり、その象徴的側面を考慮すると、エスタの出生に関わるミステリーとタルキングホーン殺害に関するミステリーとは密接な関わりがあり、切り離して考えることはできない。ただ、象徴的側面は、オルタンスがオーリックの如く生霊であることだけでなく、階級的側面をも含めて考えたほうがよいと思われる。なぜならば、ロナルド・R・トマス (Ronald R. Thomas) が注目しているように (Thomas 172)、オルタンスはフランス人の労働者階級の女性であり、フランス革命なら階級的越境を象徴する存在ともなるが、イギリスの階級社会では、封じこめられなければならない存在であるからであり、デッドロック

夫人は階級社会で夫の力によって階級の上昇をするが、自身の過去の秘密を封じこめなければならないからだ。いわば、労働者階級であるオルタンスがタルキングホーンを殺害することにより、デッドロック夫人の秘密を封じこめる役割を果たしていると考えられる。*Bleak House* を読むとき、このように階級的側面を無視することはできないが、重要なことは、デッドロック夫人が自身の准男爵の妻であるという階級意識によって孤立状態に陥り、自身の立場と良心の間で板ばさみとなることだ。

エスタの出生に関わるミステリーと関連して、ディケンズは疎外された人間の姿を描き出している。さらにディケンズは、社会においては階級や様々な規範があり、人間にそういったものにとられる感情やそういったものにより「疎外されている」という感情があったとしても、そういう感情以外に人間の普遍的な感情があることを示している。それは、具体的には親子の愛情であったり、階級を超える感情であったりする。そして、そういう人間の普遍的な感情でエスタとデッドロック夫人は結ばれることになる。*Bleak House* において、ディケンズは疎外された人間の姿と孤立状態に陥ったデッドロック夫人の姿をうまく調和させて描き出しているが、本論文では、疎外された登場人物について考察した上で、階級がもたらす孤立状態をデッドロック夫人がいかに超越するかということについて述べてみたい。

1. エスタの人生初期における疎外感

アラン・グラント (Allan Grant) が指摘しているように、自身の出生が自身の強い孤独感と関連づけられるミステリーであることは、*Bleak House* の主人公エスタの語りの最初からエスタにははっきりしている (Grant 115)。エスタは、厳格な養母ミス・バーバリ (Miss Barbary) に育てられるが、近所の学校の他の女生徒たちとの間に隔たりを感じる。学校へ行くようになった最初の週にある女生徒がパーティーに招かれ、エスタは大喜びするが、養母は、エスタに代って堅苦しいことわり状を出す。それだけでなく、他の生徒の誕生日には学校の授業が休みになり、それぞれの家で祝いをすることに

Bleak House

なっていたが、エスタの場合にはそういうことがなく、エスタの家では、彼女の誕生日が一年中で一番悲しい日となる。ミス・バーバリは、エスタの出生を悲劇的なできごとと考え、次のように語る。

‘For yourself, unfortunate girl, orphaned and degraded from the first of these evil anniversaries, pray daily that the sins of others be not visited upon your head, according to what is written. Forget your mother, and leave all other people to forget her who will do her unhappy child that greatest kindness. Now, go!’ (17)

「かわいそうにお前はみなし児になって、あのいまわしい誕生日の最初から恥さらしの身になったのだから、本に書いてあるとおおり、他人の罪の報いが自分の頭の上に加えられないように、毎日お祈りをしなさい。自分のお母さんのことなど忘れておしまい。そして、みんな他の人がお母さんのことを忘れるのは、そのままにしておきなさい。忘れてくれるのがあれの不幸せな子供にとっては一番の親切になるのだから。さあ、もう行きなさい！」

義母からこのように言われることによりエスタは疎外感を感じ、自分が生まれてから一度も誰にも喜ばれたことがない、また自分がたった一人の友達である人形のドリー（Dolly）を大事に思っているのと同じくらい自分のことを思ってくれる人が、広い世間に一人もいないと悟る。エスタは、このような疎外感を後にデッドロック家の獵園の中にある小さな教会で再び感じる。礼拝の最中エスタは、デッドロック夫人の顔を見、養母の家で送った孤独な日々を思い出す。動揺し、不安になったエスタは、朗読されている聖書の言葉に注意を向け、古い記憶のかけらを忘れようと努めるが、耳に聞こえてくる声が養母の声のような気がする。さらに、デッドロック夫人の顔に驕慢さ、傲慢さを見てとったエスタは、自分の過去の姿、かつて誕生日になにも祝っ

でもらえなかった子供の姿が自分自身の目の前に生き返ってくるような気がする。ここでエスタが感じる疎外感、階級における疎外感であると同時に、母親から見捨てられたという直感的な疎外感である。

階級に関しては、*Bleak House* のサー・レスター・デッドロック (Sir Leicester Dedlock) が准男爵であることに注意を向ける必要がある。この准男爵は、勲爵士とともに世襲貴族 (公爵, 侯爵, 伯爵, 子爵, 男爵) の下に位置づけられる。¹ イギリスの国家レベルにおいて准男爵は、世襲貴族に比べてその影響力は小さく、上院に議席を持っていないが、その地位は、中流階級に属する (Pool 37-38)。ただし、准男爵の地位は、中流階級の上層部にあり、世襲貴族に比べてその影響力が小さいが、ディケンズは、レスタ・デッドロックほど強大な准男爵は世にいないと描写している。レスタ・デッドロックは、世の中は山がなくともすむであろうが、デッドロック家なくしては成り立つまいという持論を持ち、紳士としての誇りを持っている。一方、准男爵の妻の場合に用いられる「レディ」という称号を持っているレディ・デッドロックは、美貌、自尊心、野心、驕慢な不屈さ、良識に加えて富と身分を持つがゆえに、のし上がっていき、上流社会の消息の中心となり、上流社会という木の頂上に位置するようになったのである。エスタは階級的に上にいるデッドロック夫人に気品や魅力とともに高慢、権勢を感じとるが、第23章の冒頭でデッドロック夫人の姿を見ると、われ知らず幼いころに立ち帰ると述べていることを考慮すると、ディケンズが血縁関係が最初謎にまつまれている作品において、エスタが無意識に母親から見捨てられたという疎外感を感じていることを巧みに表現していると言えよう。

2. 疎外感を持つ子供たち

ここでディケンズが母親から見捨てられたという疎外感を感じるエスタの物語と平行して、母親から無視されているという疎外感を感じる子供たちを描いていることに注目したい。第4章「望遠鏡的博愛」‘Telescopic Philanthropy’でディケンズは、ジェリビー (Jellyby) 夫人が自分の周囲のことは

Bleak House

気づかず、遠くのことばかり見ていることを描写している。彼女は、ニジェール (Niger) 河の左岸で、150から200ほどの健康な家庭にコーヒーを栽培させ、ポリオブーラ・ガー (Borrioboola-Gha) の土民を教育させることを望んでいる。*Bleak House* が出版される10年前、主にファウエル・バクストン (Fowell Buxton) によって管理されたアフリカ文明化協会 (African Civilization Society) とニジェール協会 (Niger Association) は、無謀な遠征を計画した。三隻の蒸気船、そのうち二隻は、アルバート (Albert) とウィルバーフォース (Wilberforce) という名前であったが、アフリカに向けて出港した。目的は、北部ニジェールとの貿易を開始することと、キリスト教の教化の中心地を確立することであった。この計画に関しては、多くの人が悪性の風邪で死んだので、全ての企てが一年以内に断念され、最終的には失敗に終わった。遠征に関するバクストンの主な目的は、合法的な商業によりアフリカ人を奴隷売買から守ることであった (House 87)。²

このバクストンによって計画された遠征がジェリビー夫人が没頭するアフリカ開発計画のモデルとなっていると考えられる。ジェリビー夫人はアフリカ開発計画に没頭するあまり、家庭を無視し、子供を無視している。第4章でエスタたちがジェリビー夫人の前に出るとき、子供たちの一人が大きな音を立てて階段から落ちるが、その際のジェリビー夫人の様子をディケンズは、次のように描写している。

Mrs. Jellyby, whose face reflected none of the uneasiness which we could not help showing in our own faces, as the dear child's head recorded its passage with a bump on every stair—Richard afterwards said he counted seven, besides one for the landing—received us with perfect equanimity. She was a pretty, very diminutive, plump woman, of from forty to fifty, with handsome eyes, though they had a curious habit of seeming to look a long way off. As if—I am quoting Richard again—they could see nothing nearer than Africa! (36)

かわいい子供の頭が一段ごとにドシンドシと墜落を告げるので一踊り場の音を別にしても7回音が聞こえたとリチャードがあとで言いましたー私たちは顔に不安の念をあらわさずにはいられませんでした、ジュリー夫人はその気配も示さず、平静そのもののようにして私たちを迎えるのでした。40歳から50歳のあいだの、とても小柄で肉づきのよい、きれいな人で、その目は美しいけれども、はるか遠いところを眺めているように見える奇妙な癖のある目でした。まるでーまたリチャードの言葉を使いますがーアフリカより近いところにあるものはすべて見えないみたいに！

「アフリカより近いところにあるものは全て見えないかのような」表現されるジュリー夫人は、ポリオブーラ・ガー関係の仕事に追われ、子供たちが怪我をしてもピーピー (Peepy) がゆくえ不明になって家に戻ってきてても平然としている。キャディ (Caddy) は、母親から無視されているという疎外感を「ママは親としての義務をどうしたの？ きっと社会とアフリカに全部譲り渡しちゃったんでしょ！」(47) と表現する。キャディは後に、プリンス・ターヴィドロップ (Prince Turveydrop) と婚約するが、キャディは、自身が母親にとってペンとインクにすぎない存在であり、結婚すれば、もう二度とアフリカの話が聞かされることはない、と自身の本心をエスタに明かす。注目に値することは、キャディとプリンスに共通点があることだ。その共通点とは、両者とも親の犠牲者と言っていい存在であることだ。プリンスの父親のターヴィドロップ氏は、太った紳士で行儀作法にかなった立居振舞を心がけ、上流の有閑人士の集まる盛り場にひんばんに出入りし、上流人士の集まる季節にブライトン (Brighton) その他の遊覧地に姿を見せ、とびきり上等の服装をして遊び暮さなければいけない、と考えている。夫にそういう生活を送らせてやるため、また夫の地位を保つため、彼の妻、すなわち、小柄で、従順なダンス教師は、骨を折って働き、亡くなってしまったのであった。母親が亡くなった後、息子のプリンスは、母親にかわって父親の

Bleak House

ために働き、年老いた父親をあがめている。ポール・デイヴィス (Paul Davis) は、ターヴィドロップ氏を怠惰な上流階級の模倣者にし、息子の寄生者にするものはダンディズムである、と指摘している (Davis 137)。³ ジェリビー夫人の「望遠鏡的博愛」が子供たちを無視することにより、彼女の子供たちへの愛情が欠けていることを示している一方で、⁴ ターヴィドロップ氏のダンディズムも妻と息子に犠牲を強いるがゆえに、夫の妻に対する、また父親の息子に対する愛情が欠けていると言わざるを得ない。これらのことは、エスタが作品の最初孤児であり、疎外感を感じて成長したというプロットと密接に関係していると考えられる。なぜなら、デッドロック夫人にホードン (Hawdon) 大尉との過去の関係を封じこめさせ、子供がいたという過去を封じこめさせる原因は、階級システムであり、レスペクタビリティーであると言っても過言ではないからだ。ここで、ディケンズが階級システムにおいて高い位置にいる人間と低い位置にいる人間が相容れない関係にあることを示していることに注目したい。第40章において、国の選挙戦の結果について尋ねるレスタ卿に対し、タルキングホーンは、鉄工場主ラウンスウェル (Rouncewell) の息子を立てようとしていた選挙区でレスタ卿が完全な敗北に終わり、ラウンスウェルと彼の息子がレスタ卿の敵に回って選挙運動を行っていた、と言う。プロット上重要なことは、ラウンスウェルの息子がデッドロック夫人に仕えるローザ (Rosa) と結婚したがっていることである。自身の敵と言ってもいいラウンスウェルの息子と自身の家の女中であるローザと結婚したがっている男が同一人物であることを知ったレスタ卿は、次のような反応を示す。

‘Then upon my honour,’ says Sir Leicester, after a terrific pause, during which he has been heard to snort and felt to stare; ‘then upon my honour, upon my life, upon my reputation and principles, the floodgates of society are burst open, and the waters have—a—obliterated the landmarks of the framework of the cohesion by which things are held together!’ (570-71)

「なんということだ」レスタ卿はしばらく恐ろしいように押し黙っていて、その間すごい鼻息が聞こえ、目を見張っているのが感じられたが、その後で言う。「私の名誉、生命、名声、確信にかけて言うが、社会の水門が押し流され、奔流が万物の連帯の機構を破砕してしまったのだ！」

レスタ卿の「社会の水門が押し流され、奔流が万物の連帯を破砕してしまったのだ」という言葉は、階級社会の秩序が階級闘争により、維持できなくなっていることを示している。このような状況に抵抗しようとするかのように、デッドロック夫人は、「私はあの娘を手放すつもりはありません」(571)と言うが、レスタ卿は彼女の言葉に対し、「その言葉は私も嬉しく思うよ。私の言いたかったのはこうです。あなたがあの娘が目にかけてやるに値すると思うからには、あの娘をこうした危険なやからの手から守ってやるよう、力を貸してやりなさい。あのようなやからと付き合えば、あの娘の義務と処世の方針にとんでもない危害が及ぶということを、教えてやりなさい。あの娘にはもっと幸福な未来を与えてやりなさい。しかるべきときが来たら、チェスニー・ウォールド (Chesney Wold) で彼女の先祖に対して恥かしからぬ夫を見つけてあげよう、と言ってやったらいいでしょう。」(571)と言う。このレスタ卿の言葉は、明らかに自身が階級的に上にいると意識していて、階級的に釣り合った結婚が望ましいと考えていることを示している。ディケンズは、第40章のタイトル「国の問題と家の問題」により、読者に選挙戦から始まった階級闘争が家の中にまで持ち込まれたかのような印象を与えている。レスタ卿の言葉に逆らうかのように第48章ではラウンスウェルがローザについて、彼女がチェスニー・ウォールドに留まることに反対であるという自身の考えを伝える。ラウンスウェルの言葉を聞いたレスタ卿は、自分の耳を疑いかなり動揺するが、そのときデッドロック夫人は、「あの子はとてもいい子です。私は一つとして文句はありません。しかしあの子は自分の受けているかずかずの恩恵や幸運がまるでわからず、恋におちたあまり一というよりは、愚かにもそう思い込んで一その有難みに気付いていないのです。」

Bleak House

(656) と言う。このようなデッドロック夫人の言葉の後レスタ卿は、妻にそう考えるだけの理由と根拠があるに違いないと考え、妻の意見（ローザに暇を出すこと）に賛成する。プロット上注目に値することは、デッドロック夫人は、本心では身に迫りかけている非難や恥辱から自身を守るために、ローザに暇を出すのだが、デッドロック夫人が言っている言葉が、一方で現在彼女が感じている気持ちを表していることだ。第21章においてかつてホードン大尉の部下であったジョージ（George）は、莫大な借金をしたホードン大尉に怒りを感じているスモールウィード（Smallweed）老人に対し、ホードン大尉が窮乏状態にあったことを言い、「私は、大尉殿が病気のときも丈夫なときも、富んでいたときも貧しくなったときも、いっしょでした。」

(301) と言い、「大尉殿はずっと前に溺死したのです。自分はそう信じております。船から落ちたのです。」(301) と言う。ずっと一緒にいたジョージでさえ、このようにホードン大尉が死んだと思いきこんでいるので、デッドロック夫人が彼を死んだと思いきむのも無理はない。また、第2章「上流社会」でデッドロック夫人は、番人小屋をながめ、女に追いかけられた子供が一人、雨の中へ走り出て、雨具にくるまって門をはいってきた男に出くわすのを見て、すっかり不機嫌になってしまった、と描写されているが、このことは、ホードンとの間に子供があったにもかかわらず、死んだと思った子供ともはや会うことができないため不機嫌になったことを暗示している。娘のエスタは、第36章で母親からの手紙により、母親が娘が死んだものと思いきこんでいたこと、母親の姉がエスタにまだ息があると解ると、生き長らえるのは望ましくない不本意なことと思いきながらも、その厳格な義務感から、全く誰にも話さずにエスタを育てたこと、を知る。このようにディケンズは巧みなプロット展開により、デッドロック夫人の真実を読者に伝えるが、重要なことは、レスタ卿と結婚し、かずかずの恩恵や幸福にあずかったデッドロックが、心の底で深刻な疎外感を感じていることだ。彼女の感じる疎外とは、自身の自然な状態から疎外された状態のことである。彼女の心理は、彼女が恵まれた境遇にいるにもかかわらず、ホードン大尉の墓を訪れるという彼女の行為に

より明らかである。ディケンズは、そのような心理状態からいかにレッドロック夫人が解放されるかを *Bleak House* において示している。

3. ジョーと疎外

ここで、四つ辻掃除人 (crossing sweeper) のジョー (Jo) に注目したい。彼は身分は低いが疎外された子供であるエスタの物語において重要な役割を演じているからだ。また、ジョーは階級的に上にいるデッドロック夫人とエスタの出生の秘密を暗示することから、象徴的意味において階級的越境の橋渡しをする人物とも言える。

まず、ジョーの仕事である四つ辻掃除人について触れておきたい。ロンドンの主要な交差点には、*Bleak House* のジョーのような四つ辻掃除人が必ずいた。通行する荷車や馬車をひらりひらりとかわしながら、彼らは、上流のお偉方が足を汚さずに道を渡れるように通りにたまった泥や塵を箒で払い除けていく。特に雨の日が、彼らの本領を発揮するときである。これは、あまり割の合う仕事ではなく、週に7シリングといったところが妥当な平均賃金であった。ただし、同じ場所でずっと仕事をしている掃除人は、運がよければ「常客」と知り合い、ちょっとした使い走りなどに使ってもらったりすることもある (Pool 237)。さらに、四つ辻掃除人は、使い走りの他に職業まがいのこの仕事を持つことによって街頭の乞食と同等に見られることなくチップをせびることができた (サザーランド 110)。第16章でデッドロック夫人にチップを求めているジョーの姿は、当時の四つ辻掃除人の姿を忠実に再現している、と言ってよかろう。

作品におけるジョーの役割は、血縁関係を暗示し、母親と娘を間接的に結びつける役割である。第16章でジョーは、デッドロック夫人にホードン大佐の墓地について次のように尋ねられる。

‘Is this place of abomination, consecrated ground?’

‘I don’t know nothink of consequential ground,’ says Jo, still staring.

Bleak House

'Is it blessed?'

'Which?' says Jo, in the last degree amazed.

'Is it blessed?'

'I'm blest if I know,' says Jo, staring more than ever; 'but I shouldn't think it warn't. Blest?' repeats Jo, something troubled in his mind. 'It an't done it much good if it is. Blest? I should think it was t' othered myself. But I don't know nothink!' (225)

「このいまわしい所が霊園なの？」

「霊園なんて知らないよ」ジョーはなおもじっと見つめながら言う。

「これは神聖なところなの？」

「どこが？」とジョーは極度に驚いて言う。

「これは神聖なところなの？」

「そんなことわからないよ」とジョーはますますじっと見つめながら言う。「でも、たぶん、そうじゃないだろうね。神聖なところ？」とやや心配になって繰り返しながら、「もしそうでもたいしたききめはなかったね。神聖なところ？ まったく違うものだろうと思うがね。でもなんにも知らないよ!」

この引用は、ジョーの話し方が標準的でないという特徴を示している。'wasn't' に対し 'warn't', 'nothing' に対し 'nothink', 'I don't know nothink', という二重否定, 'consecrated' に対して 'consequential という誤用された言葉づかいでジョーは、はからずも、自らが階級的に下の人間であることを示しているが (Leech & Short 169), これは、ディケンズが教養のなさを示すため、意図的に表現方法として用いる誤用であると言ってよからう。社会から無視されたような状態にある子供ジョーは、ひどい状態のスラム街からセント・オールバンズ (St. Albans) へ天然痘 (smallpox) を運ぶ。そこでエスタは病気になり、彼女の病気は、彼女のアイデンティティの物語を危機的

状況へ追いこむ (Davis 36)。スラム街を放置し、市民を無視するような社会は、まるで子供を無視したり虐待する無責任な親のごときのものである。また、ジョーやエスタや小説のその他の子供たちは、親から無視された犠牲者と言ってもいい存在である。エスタは、ジョーによってもたらされた天然痘により、すっかり変わりはてた顔になってしまう。金持ちの場合よりも貧乏人の方が伝染病にかかりやすく、伝染病の普及は、住居としての良い宿泊施設、良い衣類、良い食事の不足によるものである。

しかし、作品においてエスタがジョーによって天然痘をもたらされることは、単にエスタがスラム街の影響を受けることを示すにとどまらず、作品において重要な意味を持つ。その意味とは、見捨てられた子供のイメージの強調である。さらに重要なことは、エスタの顔の変化が結果的に彼女と母親の心の距離を縮めることだ。第36章でエスタは、赦しを乞う母親の姿を見、神の摂理に心を打たれる。エスタは、顔が変化してしまったので、顔が似ていることで母親に恥ずかしい思いをさせないで済む、今なら自分と母親とを見くらべても、誰一人として二人の間に関係があろうなどと考える人はいないであろう、と考える。しかし、デッドロック夫人は、かつての気位高く周囲を見下していた姿とはうってかわって対照的に恥を知りへり下った気持ちになり、自然な感情をエスタの前に吐露する。また、デッドロック夫人は、エスタが病気の間、気も狂わんばかりだったと言う。さらに、エスタと別れる前にデッドロック夫人は、「きらびやかで、華やかで、崇拜者に囲まれているレスタ卿夫人のうわさを聞くことがあったなら、その仮面の下には良心の呵責にさいなまれているみじめなお前の母親がいるのだと思っておくれ。それで赦せるものなら赦しておくれ。赦してはいただけないだろうけど。」

(512-13) と言う。このことから、ディケンズが身分は高くともレスペクタビリティーから解放され、母親としての自然な感情を取り戻したデッドロック夫人を描き出していると言ってよかろう。デッドロック夫人は、レスペクタビリティーを守るため過去を隠蔽してきたが、その行為は、彼女自身を自然な感情や神の摂理から遠ざける結果となったのであった。それは、いわば、

Bleak House

人間性からの疎外と言ってもいい。デッドロック夫人は自分自身から逃れて、孤独の高みから飛びおり、階級システムの中、准男爵夫人として生きようとしたが、その行為は現実生活において強力な鎮静作用をもたらし、万事結構であるかのような気持ちにさせる一方で高い代価を払わなければならない行為であったのだ。デッドロック夫人は自分自身であることをやめ、自分の自我から疎外されなければならなかったのである。その結果デッドロック夫人は、孤立状態に悩まされ、名前が発音の上で暗示するように、まさに心理的行き詰まり（deadlock）状態に陥る。*Bleak House* においてディケンズは、そのような孤立状態からいかにデッドロック夫人が解放されるかを描いているが、そのことを以下見ていきたい。

4. 孤立状態の超越

作品においてエスタとデッドロック夫人の人間性についての見解を述べる人物、それがマドモアゼル・オルタンス（Mademoiselle Hortense）である。オルタンスは、エスタのことを次のように言う。

‘Assuredly; mademoiselle, I am thankful for your politeness. Mademoiselle, I have an inexpressible desire to find service with a young lady who is good, accomplished, beautiful. You are good, accomplished, and beautiful as an angel. Ah, could I have the honour of being your domestic!’ (319)

「かしこまりました、ごていねいにありがとうございます。マドモアゼル、じつは、わたしはやさしくて、教養が深く、美しいご令嬢に奉公したくてたまらないのでございます。お嬢さまは天使のように、おやさしくて、教養が深く、美しいかたでいらっしゃいます。ああ、もしわたしをあなたさまの召使にさせていただきましたら！」

このようにエスタの性格を賞賛する一方で、オルタンスは、デッドロック

夫人のことを自身にとって気位が高すぎたと言う。オルタンスは、准男爵夫人になったことによりデッドロック夫人の気位が高くなり、周囲を見下していた様子を伝えている。エスタは、雇ってほしいと訴えるオルタンスに、彼女を侍女に雇える身分ではないと説明して断わるが、重要なことは、ディケンズがオルタンスに二人の人間性について言及させることにより、階級の上昇により人間性から疎外されたデッドロック夫人を印象づけていることだ。ディケンズは人間性から疎外されたデッドロック夫人を印象づける一方で、人間性を回復する彼女をも示している。第59章でエスタは母親の手紙を読むが、その手紙は、デッドロック夫人がエスタの姿を一目見ようとしていたことだけでなく、それまでデッドロック夫人を支えてきたものがすべて一瞬にして崩れ落ち、良心の呵責に苦しんでいるという心情が書かれてある。デッドロック夫人を支えてきたものとは、階級であり金であり、彼女自身のレスベクタビリティーであると考えられるが、彼女は、そういったものから解放され、人間として自然な状態を回復して死ぬ。デッドロック夫人の行動は、彼女が己一個の生命、財産、名誉というようなく己の生命に固有なもの>を投げ捨てて、己の本質であるもの、すなわち、良心、愛に献身したことを示している。彼女の場合、献身という自己否定がなければ、己の本質は内面の暗がりから外に出ることができない。本質が現象化しないのである。すなわち、デッドロック夫人は、良心と愛に献身した結果、階級がもたらす孤立状態を超越したと断言している。

第55章においてデッドロック夫人は、タルキングホーン殺害の嫌疑を受け追われる身となる恐怖に襲われ逃げ出し死ぬしかないと思うが、いっさいの宝石類や持ち金を部屋に残し立ち去ることや、エスタへの手紙において、「今まで私を支えてきたものが全て一瞬にして崩れ落ち、私が良心の呵責におののいて死ぬのは、当然の報いなのです」(808)と書いていることから、究極的には彼女の死への旅路は逃亡ではあるが一方で人間としての解放と言ってもいい。

ディケンズはこのように、デッドロック夫人が孤立状態を超越することを

Bleak House

示す一方で、疎外感を感じていたエスタが、周囲の人間の慈悲心により疎外感を克服していく過程をも示している。エスタが彼女自身の個人的な道徳的感情の強さ、深さにより、逆境にうち勝つことは事実であるが (Kaplan 302)、彼女がジャーディス氏の力を借りて幸福を得ることを見落としてはならない。

エスタを引きとって後見人となるジャーディス氏は、シュワルツバッハ (F. S. Schwarzbach) が述べているように、無私の寛大さの権化と言ってもいい人物である (Schwarzbach 137)。第44章でエスタへの手紙で結婚の申し出をし、いい返事をもらったので、エスタと結婚する予定であったジャーディス氏は、ウッドコートとエスタの間の愛情を見てとり、エスタをウッドコートに譲り渡すからである。また、ジャーディス氏の行為は、エスタを義務感から解放する意味を持っている。エスタがジャーディス氏からの結婚の申し出に対し、第44章で、「あの方を幸福にするために私の生涯を捧げることこそ、感謝を少しでも示すことです」(611) と語っているように、エスタは、後見人として温かく見守ってくれただけでなく、顔が変化してしまい、私生児であることが判明しても、「荒涼館」の主婦に迎えてくれるというジャーディス氏に深く感謝しているからである。このようなジャーディス氏は、後見人として、エスタの母親からの疎外感を少なからず解消するだけでなく、結婚の約束をしたにもかかわらず、ウッドコートに彼女を譲り渡すことにより、彼女を感謝の気持ちからくる義務感から解放する。

ディケンズは義務感から解放されるエスタを示す一方で、ジョーとリチャード・カーストン (Richard Carston) の死の描写により、両者が地上の苦しみから解放されることを示している。ジョーが死ぬ前ウッドコートは、祈りを知っているか尋ねるが、ジョーはチャドバンド (Chadband) がスナグズビー (Snagsby) の家で祈りをやっているのを聞いたことがあるが、ひとりごとを言っているみたいで、自分には何もわからなかったと言う。このことはチャドバンドの祈りが自己満足的であり、他者を救済する力などないことを示している。チャドバンドは、ヴィクトリア朝時代において固定された身

分からなる旧体制に献身した福音主義の説教者のようである。貧しい人たちに対する彼らのメッセージは「汝の身をわきまえよ」(Know Thy Place) であり (Altick 174), ヴィクトリア朝時代の賛美歌「城内の富める者 城門の貧しき者 神は彼らを身分高き者と低きものと定めたまえり」を肯定するものであった。⁵ 第25章でチャドバンドはジョーのことを「両親を欠き、親類を欠き、羊の群れと牛の群れを欠き、金と銀とそして宝石を欠きたる者」(358-59) と言い、その原因を真理の光を欠いているからだと言べ、ジョーに生まれつき神に見放された存在であると感じさせることから、ヴィクトリア朝時代の福音主義の説教者のようであるだけでなく、偽善者とでも言ってもいいような存在である。ジョーはウッドコートが「天にまします、われらの父よ」(649) と言った後に続いて祈りを捧げるが、祈りの途中で息絶える。ディケンズは、ジョーの死を見取る慈悲深いウッドコートを印象づけるとともに、ジョーの死を描写した後、第47章の最後に次のように書いている。

The light is come upon the dark benighted way. Dead!

Dead, your Majesty. Dead, my lords and gentlemen. Dead, Right Reverends and Wrong Reverends of every order. Dead, men and women, born with Heavenly compassion in your hearts. And dying thus around us every day. (649)

暗いゆき暮れた道に明りがついた。死んだのである！

陛下、死んだのであります。上下両院の閣下並びに諸賢、死んだのであります。各派の教会で道を説く有徳、無徳の先生方、死んだのであります。胸のうちに神のごとき慈悲心を宿しておられる皆さん、死んだのであります。そして我々の周囲には毎日このように死にゆく者がいるのですよ。

ジョーの死は、ディケンズが地上において疎外され犠牲者となった子供に

Bleak House

避難所を与えたということで「天に召される子供のイメージ」を印象づけるが、引用は疎外され犠牲者となった子供に対する社会的救済が必要であることを訴えているかのようなのである。ディケンズは、*Oliver Twist* の中でオリヴァー（Oliver）が煙突掃除人（chimney sweeper）にされそうになることを通して煙突掃除人について若干説明しているが、ウィリアム・ブレイク（William Blake, 1757-1827）の“The Chimney Sweeper”に見られる「天に召される子供のイメージ」を印象づけている。4～7歳で売りに出された煙突掃除人は、救貧院から出て煙突掃除人になる場合もあれば、両親に売りに出される場合もあった。両親は、7年間の年季奉公で20～30シリングを受け取った。ピーター・アクロイド（Peter Ackroyd）は、この詩にブレイク自身の考える「父なる神」という霊的家系（spiritual genealogy）を読み取っているが、ジョーの最後はちょうどアクロイドの考える霊的家系で説明できる（Ackroyd 124-25）。リチャードの場合も例外ではない。ジョーと同じくみなし子であるリチャードは、ジャンディス対ジャンディス事件に関わりを持つがゆえに悲劇的な結末を迎えるが、死ぬ前に、エイダ（Ada）に「君の財産を全部風に飛ばしてしまったね。エイダ、これから僕は新たに出直すから、全部赦しておくれよ。」（870）と言う。ディケンズは、リチャードの死を新たな人生の始まりとして描写しているが、リチャードの行き先は地上ではなく天国である。リチャードの場合は、ジョーと違い子供ではないが、天国にいる父（神）のもとへ行くと考えると、彼もまた「天に召される子供」としてとらえることができよう。ディケンズは、ジョーとリチャードの死を描くことにより地上が救いのない状態であり、社会から疎外されたジョーとリチャードが死により地上の苦しみから解放される姿を描く一方で、地上において他者の慈悲によって疎外感から救われるエスタの姿を示している。エスタは第67章の最後で、満ち足りた自身の生活について語っているが、エスタは、貧富を問わず困っている同胞を慰めるウッドコートとの生活に満足している。

ディケンズは、*Bleak House* において、デッドロック夫人がいかに階級が

もたらす孤立状態を超越するかを示す一方で、社会から疎外された人間を救うには、ジャーネイス氏やウッドコートが示すような慈悲心を全ての人間が持つ以外に方法がないことを示している、と言っていいだろう。

注

1. 公爵 (duke), 侯爵 (marquis), 伯爵 (earl), 子爵 (viscount), 男爵 (baron) (この順で格付けされる) は、世襲貴族として知られている。
2. ディケンズは慈善事業の失敗後のジェリビー夫人を次のように描いている。

She has been disappointed in Borrioboola-Gha, which turned out a failure in consequence of the King of Borrioboola wanting to sell everybody—who survived the climate—for Rum; but she has taken up with the rights of women to sit in Parliament, and Caddy tells me it is a mission involving more correspondence than the old one. (878)

3. ディケンズは、第12章でデッドロック夫人を取り巻く名流人士のダンディズムを次のように描写している。

Dandyism? There is no King George the Fourth now (more's the pity!) to set the dandy fashion; there are no clear-starched jack-towel neckcloths, no short-waisted coats, no false calves, no stays. There are no caricatures, now, of effeminate Exquisites so arrayed, swooning in opera boxes with excess of delight, and being revived by other dainty creatures, poking long-necked scent-bottles at their noses. There is no beau whom it takes four men at once to shake into his buckskins, or who goes to see all the executions, or who is troubled with the self-reproach of having once consumed a pea. But is there Dandyism in the brilliant and distinguished circle notwithstanding, Dandyism of a more mischievous sort, that has got below the surface and is doing less harmless things than jactowelling itself and stopping its own digestion, to which no rational person need particularly object?

Why, yes. It cannot be disguised. There are, at Chesney Wold this January week, some ladies and gentlemen of the newest fashion, who have set up a

Bleak House

Dandysm—in Religion, for instance. Who, in mere lackadaisical want of an emotion, have agreed upon a little dandy talk about the Vulgar wanting faith in things in general; meaning, in the things that have been tried and found wanting, as though a low fellow should unaccountably lose faith in a bad shilling, after finding it out! Who would make the Vulgar very picturesque and faithful, by putting back the hands upon the Clock of Time, and cancelling a few hundred years of history.

There are also ladies and gentlemen of another fashion, not so new, but very elegant, who have agreed to put a smooth glaze on the world, and to keep down all its realities. For whom everything must be languid and pretty. Who have found out the perpetual stoppage. (159-60)

ジュリエット・ジョン (Juliet John) は、ディケンズの小説が、ダンディズムを興味あるものとして提示している一方で、深刻な道徳的社会的危険状態として提示している、と述べている (John 156.)。

4. ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-73) はハリエット・テイラー (Harriet Taylor) への手紙の中で「*Bleak House* は、ディケンズの作品の中で最悪の作品であり、私の唯一嫌いな作品である。この作品には、女性の権利をあざ笑うような下品な無礼さがある。そのあざ笑いは、最も下品なやり方で行われている。それは、下品な男性がかつて学問のある女性を子供や家庭を無視しているとしてあざ笑ったのと同様のやり方である。」と述べている。[John Stuart Mill, “A Letter to Harriet Taylor” (20 March 1854)] ディケンズの作品には、家庭の天使が多く存在し、*Our Mutual Friend* (1865) においても、改心し、ロークスミス (Rokesmith) との駆け落ち結婚の後ベラ (Bella) が *Complete British Wife* 『完全なる英国の主婦』という題のついた家事ガイドブックを参考していることから、ディケンズが家庭の天使としての女性の使命を強調しその考えを支持していることは明らかであるが、*Bleak House* におけるジェリビー夫人は、コンテキスト上母親から見捨てられた存在であると感じるエスタを強調するため、非家庭的側面が強調されて描かれていると考えられる。
5. セシル・フランシス・アレグザンダー (Cecil Frances Alexander, 1818-95) 「みんな明るく美しい」“All Things Bright and Beautiful” (1848) の第3連からの引用。

Works Cited

- Ackroyd, Peter. *Blake*. London: Sinclair-Stevenson, 1995.
- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. New York: W.W. Norton & Company, 1973.
- Davis, Paul. *Charles Dickens A to Z*. New York: Checkmark Books, 1999.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. New York: Oxford UP, 1991.
- Grant, Allan. *A Preface to Dickens*. New York: Longman, 1984.
- Hornback, Bert G. "Noah's Arkitecture": *A Study of Dickens's Mythology*. Athens: Ohio UP, 1972.
- House, Humphrey. *The Dickens World*. London: Oxford UP, 1961.
- Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. London: Thames and Hudson, 1972.
- John, Juliet. *Dickens's Villains: Melodrama, Character, Popular Culture*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Biography*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1998.
- Leech Geoffrey N., Short Michael H. *Style in Fiction*. New York: Longman, 1981.
- Mill, John Stuart. "A Letter to Harriet Taylor" (20 March 1854), in *Dickens: The Critical Heritage*. Ed. Philip Collins. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. New York: Simon & Shuster Inc., 1993.
- Schwarzbach, F. S. *Dickens and the City*. London: The Athlone Press, 1979.
- Thomas, R. Ronald. "Detection in the Victorian Novel", in *The Victorian Novel*. Ed. Deirdre David. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- オールティック・D・リチャード (著), 要田圭治, 大嶋浩, 田中孝信 (訳) 『ヴィクトリア朝の人と思想』, 音羽書房鶴見書店, 1998.
- サザーランド, ジョン (著), 川口喬一 (訳), 『ヒースクリフは殺人犯か? 19世紀小説の34の謎』, みすず書房, 1998.

***Bleak House*: The Isolation Which Class Brings and the Transcendence of the Isolation by the Individual**

YOSHIDA, Kazuho

Bleak House (1853) is Dickens's ninth novel, published in monthly parts in 1852-53. Often characterized as the first of the late novels, *Bleak House* describes England as a Bleak House, devastated by an irresponsible and self-serving legal system, symbolically represented by the Lord Chancellor or ensconced in foggy glory in the Chancery. Dickens attacked court abuses of Chancery; his most extended criticism appears in *Bleak House*, in which the court's delays, obfuscation of issues, and self-serving procedures lead to indolence, despair, and suicide, and produce such social ills as festering slums. Dickens not only attacked court abuses but also represented the mystery of the birth of Esther Summerson and the mystery of the murder of Tulkinghorn. Esther's narrative traces her discovery of her identity as the illegitimate child of Lady Dedlock. Abandoned in infancy and raised by an abusive aunt, Esther is self-denying, unassertive young woman, grateful for any recognition she receives from the patriarchal society around her. Her situation encapsulates that of the larger society, in which traditions of aristocratic privilege deny human needs and desires and patriarchal institutions such as the courts make orphans of society's children, enable slums and disease to flourish, and suppress individual autonomy by a "philanthropy" that makes dependents of its recipients.

Dickens represented children who felt alienated and abandoned in the relation to the story of Esther. The "telescopic philanthropy" of Mrs. Jellyby causes her neglect of her family, even when her young son Peepy gets his head caught in the railing and when Mr. Jellyby, her mild-mannered husband, goes bankrupt. She employs her daughter Caroline (Caddy) as her amanuensis but neglects instructing her in domestic skills or personal grooming. Caddy resents this exploitation and confesses her resentment to Esther. Caddy escapes her chaotic home by marrying Prince Turveydrop. Vain and indolent, his father depends on

him to maintain the family income. Prince works himself to the point of exhaustion teaching dancing lessons. Jo, an illiterate crossing-sweeper and street urchin, is employed by a veiled lady (Lady Deadlock) to show her Nemo's grave. He carries smallpox to Bleak House, infecting Charley and Esther. Dickens emphasized an abandoned child and Esther's destiny by Jo, and suggested that Esther was separate from her mother.

Lady Dedlock hides her guilt about her past beneath a facade of being "bored to death", but she cannot conceal from Tulkinghorn, the family lawyer, her interest in a particular law writer. Tulkinghorn pursues her story and learns of her relationship with Captain Hawdon and of their illegitimate daughter, Esther Summerson. Lady Dedlock reveals herself to Esther, but she runs from Chesney Wold when Sir Leicester learns of her past. Disguised as a poor brickmaker's wife, she makes her way to London where she dies by the graveyard where Hawdon is buried. The flight of Lady Dedlock means not only that she can escape from the terror that Sir Leicester Dedlock might know her secret and she might disgrace the family name, but also that she is released from her class consciousness and transcends her isolation. Dickens shows that Lady Dedlock transcends her isolation which class brings by her conscience, whereas Esther transcends her state of alienation with the help of Mr. Jarndyce and Woodcourt. Dickens demonstrates that all the people have to have benevolent spirits to help those who are in the state of alienation.